
C?DE : BREAKER ~ 戦慄の紅き雷光 ~

黒い悪魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C?DE: BREAKER 戦慄の紅き雷光

【Nコード】

N0410N

【作者名】

黒い悪魔

【あらすじ】

人の悪意に際限はない。

この世には、人の創った法では決して裁くことのできない”悪”が存在する。

ある者は彼は理由を付けて法の裁きを掻い潜り

またある者は高い地位や権力を振りかざし

それらはやがて再び罪無き者に害悪を齎す。

正攻法、そんなのは巨悪相手に通用するはずもない。

ならば講じる手段はただ一つ

目には目を・・・

齒には齒を・・・

”悪”には”悪”を

CODE：00 はじめに・・・

皆さんはじめまして。

今回このNOSに初投稿させて頂く事になりました黒い悪魔です！

ここでは週刊少年マガジンで連載中のCODE：BREAKERの二次創作小説を書くことになりました。

メインは上記のCODE：BREAKERですがコラボ小説として書いていくので近々他作品をコラボさせる予定です。

初めて投稿させていただくので色々とお見苦しい所もお見せしてしまうかもしれませんが、どうかよろしく御願います。

では！

CODE：01 七人目の悪魔（前書き）

PCからの投稿なので、携帯だと見難い所があるかも・・・一応こちらでも確認して見難かったら直すつもりでいます。
というわけで第一話をどうぞ！

CODE : 01 七人目の悪魔

時刻は午後零時を回った頃

東京・・・そこは夜も眠ることのない日本の中枢。

日本中の、世界中の情報が集まり、世界中に日本の情報が飛び出していく。

そんな街の郊外にある大きな倉庫の中で・・・

・・・パン！

パン！

炸裂音のような音が響き渡る・・・それは銃声だ、一つや二つではない・・・

いくつもの銃から弾が打ち出されたような連鎖的な音も響いてくる。

そしてその音に紛れるようにして時折聞こえてくるのは・・・

・・・チン

「ぎゃー！ー！ー！」

何か金属を打ち付けるような音と身近い男の悲鳴、それもまた一つや二つではない。

・・・チン

その音と共に、複数の男の悲鳴が聞こえてくるときすらある・・・
その音と悲鳴の発生源である倉庫の中では・・・

「うわああああー!!」

「く・・・来るな!化け物!!」

体格のいい男達があちこちへ逃げ回っている。

その体には刺青が彫られており、柄物のシャツやネクタイを締めたる者もいる。

それは世間一般で言うところのヤクザ、と呼ばれる者達だ。

だが、その男達は何かに怯える様子にみつともない悲鳴を上げながら地面を転がるようにしてひたすら逃げる。

もうどこにも逃げ場がないことも知らず・・・

チン!

涼やかな音が一つ

それと同時に一人の男が全身をズタズタに切り裂かれて息絶える、ある者は四肢を寸断され・・・またある者は首が付いていない。どの死体も五体満足で残っている者は殆どない。

地面には、既に殺されているであろう男達の無惨な死体がいくつも転がっている。

そしてその周りにはいくつものジュラルミンケースが転がっており、その中の一つが倒れた衝撃で中身をぶちまけている。

その中身とは、ビニールに密閉された白い粉・・・・・・・・

もうお分かりだろう・・・・・・・・麻薬だ、床に転がる男達は麻薬の取引にやって来た。

そしてこの倉庫は麻薬取引の場として選ばれ・・・・・・・・今、彼らの死に場所と化していた・・・

「や・・・やめる・・・何が望みだ・・・・・・・・言ってみろ！俺は警視庁にコネがある、大抵の望みなら何でも叶えてやる！」

いつの間にか大きな倉庫の中にひしめいていたヤクザ達は一人残らず血の海に沈み、残ったのはその中のボスと思わしき高級なスーツで身を固めた男。

そして

この一方的過ぎる殺戮を行ったのは

「・・・・・・・・・・」

「どうだ！？何が欲しい！？地位か・・・？金か・・・？女か・・・
そうだ！今日買った極上の女をくれてやる！！まだ”どっち”も使
つてない生娘だ！」

行ったのは命乞いをする男より一回りも二回りも小柄な一人の少年、
その左手には鞘に納まった刀が握られており、真紅の瞳が何の感情
も伺わせぬまま男を見下している。

「目には目を・・・」

「!?!?!?!?!やめろ?!?!?!やめてくれ!?!」

少年は男の言葉に耳を貸さず一歩．．．また一歩と近づいていく。

「歯には歯を．．．」

「頼む!なんでもする．．．だから!」

男は必死に後ろへ後ずさるもそこは既に壁、逃げる場所などどこにも残されていなかった。

そして．．．

悪には悪の裁きを

チン！

『ご苦労様でした、コード：07・・・いえ、月城刹那』

大きな部屋の中にスピーカー音声の様な声が響く、日本の政治の中枢『国会議事堂』。

そこに少年・・・月城刹那はいた。

法で裁けぬ悪を裁く存在しない者、それがコードブレイカー。

そして本来6人のはずがその能力を変われ特例としてコード：07の数字を与えられた者・・・それが彼だ。

『あなたには驚かされてばかりですね、コード：ブレイカーとなつて二年足らずでかつての01と並ぶほどの悪を滅するとは』

「能書きはいい・・・さつさとこの胸糞悪い芝居小屋に呼んだ理由を言え」

議席の一番高いところからこちらを見下ろすようにして語りかけてくる声に刹那はただ深い下に眉を顰めて一瞥をくれる。

『・・・06といい貴様といい、飼い犬の分際で口が過ぎるぞ』

「っ・・・俺の前に面を出す気概もない腑抜けが、一丁前に飼い主を気取るか？」

『おやめなさい』

『・・・・・・・・・・』

刹那の物言いに、鋭い口調で咎めてきたのは、三つある席の右側に位置する人影から・・・だが中央の影から発せられた声に口を閉ざすことになった。

『コードブレイカー：07、今日ここへ呼んだのは他でもありません。ここ半年の間に国内の犯罪率が急上昇の一途を辿っています・・・それはご存知ですね？』

「ああ、それがどうした」

『これはまだ極秘事項なのですが・・・「捜シ者」の手の者が国内に潜伏しているようです、内一人が既にコード：06によって裁かれましたが、一人だけというのは考えにくい』

「捜シ者」

その言葉を聞いたとたん刹那の表情が僅かに変わる。

「（ついに戻って来るのか・・・）」

『コード：07、あなたには捜シ者の動きにいつでも対応できるよう、近い内に他のコードナンバーと合流してもらいます・・・ですがその前に受けてもらう任務があります』

『任務内容はコード：02を通して伝える、飼犬は黙って言われた敵を食い殺す　パシッ』

ドゴオオン！

その言葉が最後まで発せられる前に、議席の真上に一瞬紅い”何か”が火花を散らす・・・

そして次の瞬間には議席全てを打ち砕いて吹き飛ばすほどの紅い稲妻が飛来し、三つの人影もろともバラバラに打ち砕いた。

パチ・・・

パチッ・・・

三つの議席のみを正確に狙って落ちた稲妻は、そのエネルギーが視認できるほど密度をました雷撃で残った破片すらも音を立てて焼いていく。

その場に一人残った・・・否、最初から一人しかいなかった刹那はさっきまで声を発していた発声器を踏み潰しながら呟く。

「・・・・・・・・せいぜいふんぞり返っている・・・・・・・・俺に引き摺り落とされるまでな」

その身に紅い雷光を纏いながら

CODE : 01 七人目の悪魔（後書き）

はい、ここまでがプロローグになります。

彼が原作ルートに現れるのは桜の護衛の少し後になります。

次回はコードナンバー（一部）との邂逅・・・まあ既に全員知っています・・・とにかく原作キャラが登場します。

では、これからよろしく御願います！

基本用語集（前書き）

C?DE: BREAKERに馴染みの無い方のために一応主だった用語解説を作らせて頂きました。

原作知識の補完にどうぞ。

一部Wikipediaより抜粋

基本用語集

異能

ごく一部の特殊な人間が持つ力で、自然界に現存するエネルギーや物質・状態等を自在に発生させ、操ることができる能力。

例・・・『炎』『磁力』『光』『音』等

異能の力Ⅱ生命力であり、生命力が強ければ強いほど強大な異能を行使することができる。他人に分け与えることもできるが、それは自分の命を削るに等しい行為であり、与えた側は当然与えた分だけ命をすり減らし異能の能力も下がる。それは任務での死亡率の急増に直結する。

コード：ブレイカー

人より高位の異能を持ち、その力で法では裁くことのできない”悪”を裁く権限を与えられた異能者。通称『存在しない者』。

裁きを含めたありとあらゆる特権を持つのと引き換えに自らを示す個人情報は一切抹消され、死んでも墓を立てることすら許されない。国内のみならず、海外へも任務で派遣される場合があり、場所によって複数の名前や戸籍を使い分ける場合がある。

コード：ロスト

異能者が異能を過剰に多用すると起こる現象。

ロストした異能者は異能を24時間使用不可能になり、肉体的に何らかのリスクを負うことになる。（個人によってそれぞれ違う）

例・・・体温低下・幼児化・猫化、その他諸々・・・

しかし、ロストから回復する度に異能は強化されていく。

筋肉の超回復と同じ原理、・・・分かりやすく言えば死の淵から生還した”サイヤ人”のようなもの、能力だけでなく異能量の絶対値（使用限度）も向上する。

異能量（ややオリジナル込み）

異能者が使える異能の量、これも分かりやすく言えば”ロックマン”の武器エネルギーのゲージのようなもの。

ゲージがなくなると使用不可・・・つまりコード：ロスト、24時間立つと満タンまで回復する他ゲージの最大メモリが増える。

公式には記されていないが、原作の会話の中に出てくる異能の説明を纏めて平たく説明するとこんな感じ。

エデン

コード：ブレイカー及び異能者達を管理する内閣総理大臣直属の組織。組織の活動拠点は国会議事堂の中に存在するらしいが詳細は不明。

異能者・・・特にコード：ブレイカーに仕事を与え、法で裁けない悪を秘密裏に抹殺していくが、そんな異能者ですら自分達にとって「脅威になる」と判断すれば抹殺対象としてしまう非情な組織。

基本工デシにとって異能者は変えの効く消耗品にすぎない。

CODE : 02 存在しない者たち（前書き）

刹那の前に現れるのは審判者・・・奔放な少年。

そして新たに与えられる次の任務は・・・？
バイト

CODE：02 存在しない者たち

「やれやれ・・・またですか・・・刹那君」

「・・・平家か」

国会議事堂の入り口、先ほど粉々に吹き飛ばした会議室から立ち去った刹那の前に現れたのは学生服を着た一人の青年。

コード：ブレイカー02『平家将臣』

コードブレイカー達のジャッジを務める審判官でもある。

「轟音がここにまで響いてきましたよ」

「ちっ・・・やかましい、さっさと任務をよこせ・・・」飼
い犬の鏡”と無駄に時間を使い潰すつもりはない。」

刹那はこのコード：02が苦手だ。

コードブレイカー最高意思決定機関『エデン』に最も近いであろうコードブレイカー、現在の六人のコードブレイカーの中でも最も素性が知れぬ者でもある。

なにより自分が忌み嫌うエデンに従順しているという点が最も相容れないと、刹那は横目で意味ありげな笑みを浮かべる平家を睨む。

その手には最早見慣れた趣味の悪い官能小説が収まっている、早く言ってしまうえばエロh

「エロではありません、官能という名の芸術です。」

「?.....誰に言ってる.....」

「コホン、失礼.....どうしても言わなければならない気がただけです.....改めて、今月分の任務の評価および次の任務の概要を説明しに来ましたよ。」

そう言いながら一枚の紙を刹那に渡す。

B4程度のサイズの紙には大きな文字でこう書かれていた。

通知表

CODE:07

月城刹那

評価:85点

小学校のあゆみかよ・・・と当初こそ思ったがもう慣れてしまった。

心底どうでもいいという風にその評価に目を通す。

「時間を掛けすぎですよ、またどこかでサボっていましたね・・・
その分減点とみなし今回は85点となります」

「はっ・・・そうかい」

その紙を懷に適當に突っ込むと平家に向き直る。

「そして次の任務ですが・・・今回の以来はかなり大きな所からの依頼になります」

そう言いながら手にした悪趣味なタイトルの本を開いて目を通す、アレに報告事項でも書いてあるのか、それとも片手間に読んでいるのか、それは刹那からでは分からない。

「それで・・・？」

「昨今、とある企業のご令嬢が何者かに付け回されているようです。」

「ストーカー騒ぎなら警察に言え」

「そうもいかないのですよ、何しろ諸外国の大企業とも繋がりがあ
るほど巨大な企業です。それに被害も既に警察に任せられるレベル
ではないとの報告もあります、不審者・不審火・・・その他にも帰
宅中素性の知れぬ車に付け回されたという話も聞きます。」

その話を聞きながら刹那は不快気に眉を顰める。

なるほど、エデンにとってその企業が有益だからか・・・

「どこの企業だ・・・」

「あなたもよくご存知のはずですが・・・片桐財閥」

「!?!?・・・なに」

「覚えているでしょう? あなたのコードブレイカー初任務の相手先ですよ。社長の護衛任務でしたね」

「・・・まあな」

「今度はその御令嬢の護衛をしてもらいます。本来なら刻君が受け持つはずだったので・・・」

なんでも本来この任務に就くはずだったコード：04は別任務に付かなければならなかったそうだ。

コード：06 大神零がロスト、従つてもしもの際の保険としてコード：04の刻が同行する事となった。

24時間異能が使えなくなるロスト、その上身体的にも何らかのリスクを負わなければならない状況下での単独任務は確かに厳しいものがある。

従つてこの判断は順当なものといえよう。

「っ・・・零の奴・・・そこいらの三流の悪^{クズ}にまで異能を使うからすぐにロストするんだ」

「まあ今回はそうでなくとも比較的重要度の高い任務ですので、コードブレイカーを複数派遣する案は前から出ていました・・・敵に始末屋がいる上、護衛対象が”珍種”ですから」

「・・・最近零に絡んでるといふあの”珍種”か？」

「そうです、我々の異能を消し去る力を持った未知なる存在・・・大神君の”青い炎”でも燃え散らなかつたそうです、確かに興味は尽きませんね」

そこまで言い終えるとボタン・・・と本を閉じる。

「しかしこちらにも負けず劣らず重要な任務です、片桐財閥といえは日本が世界に誇る大企業の一柱です。よろしく御願いますよ・・・」
コード：07」

「ふん・・・・・・・・言われるまでも無い」

その平家の言葉を背に今度こそ刹那は議事堂から立ち去っていった。

「やつホー、刹那ジャン」

「・・・・・・・・今度はお前か・・・・・・・・刻」

議事堂の外へ出て、いざ寢床へ帰ろうとした時・・・背後から凄まじく気の抜けた声が掛けられる。

振り返れば想像通りの人物がそこにいた。

金と銀のオッドアイと呼ばれる左右で色の違う瞳、何を考えているのか分からないだらけた顔にタバコを啜えた少年がこちらを見ている。

「その様子だとエデンから報告はあったみたいだな、悪いネ仕事押し付けちゃってサ」

「ロストしたコード：ブレイカーを単独で放り出すわけにもいかんだろう」

「それで死んでも自己責任だろ・・・惜しいことしたな・・・それに片桐財閥のご令嬢サンって滅茶苦茶可愛いって評判ヨ」

先の話にも名が出たコード：05『^{トキ}刻』・・・

06の大神零とは犬猿の仲である彼は歩道のガードレールの上に座って煙を吐き出す。

05と06はことあることに反目し合っている、喧嘩するほど仲が
良いとは言つがこいつらに限ってそれは無いだろうと刹那は思った。

「・・・珍種も女だろう?」

「まあそうなんだけどサ・・・ちょっと変な女っていうか、変わり
者っていうか・・・(どう言おうかサ・・・こいつとあの珍種、絶
対馬合わないと思うシ・・・)」

「・・・まあいい、ところで・・・態々こんな場所まで何の用だっ
たんだ?」

刻の言葉を適当に流しながら聞く、珍種に興味はあつたが特別知り
たいなどという感情も刹那には無かつた。

「いや、仕事明日からだし暇でサ・・・大神おちよくりに行く前に
夜の街にナンパでもしにいかネ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「じゃあ行いっぜ」

「おい、まだ行くなんて言っていないぞ！」

刹那の返事を聞くより先に肩を抱いて歩き出す刻。

傍目から見れば人知れず悪を裁く”存在しない者”にはとても見えず、その姿は年相応の少年達に見えることだろう。

結局この夜、刹那は夜明けギリギリまで刻の夜遊びに付き合わされるはめになったのだった。

P M : 3 : 3 0 . . . 放課後

「と．．．刻君!？」

とある学校の一室に一人の少女の叫びが木霊する。

「やつほー桜ちゃん、大神が弱ってるって聞いたから見学に来ちゃったヨ」

その声の主、桜の目の前にはオッドアイの少年、刻。

あの後刹那を夜明けまで引つ張りまわして遊びほつけた後．．．

宣言通り彼は大神をおちよくりに態々学校にまでやって来たのだった。

「なぜこいつがここに．．．」

「．．．申し訳ありません」

「おいおい、神田ちゃんにつつかかんなヨ」

相変わらずの緩んだ顔つきで刻は大神に近付くと・・・・・・・・唐突に抱き付いた。

これなんてBL？

と事情を知らぬものが見ればそう思うかもしれないが両者にそういう趣味は無い。

「大神く外は暑いヨ～～？お前はヒエヒエでいいねえ～冷たくてキモチイイ」

などといいながらスリスリと頬擦りを始める。

だがそれをいつまでも許す大神でもない、乱暴に腕を振るって刻を引き剥がす・・・

だがそれと同時にその場でバランスを崩して倒れかけるところを神田に支えられる形となる。

「無理は禁物です、我が主人」

その様子を見ながら刻はタバコを啜える・・・

彼の身分は学生、しかも場所は学校内、その上一応教職員の身分に収まる神田の目の前にも拘らずお構いなしで煙を吐き出す。

「暴れんなよみつともない、いつもみたいに青い炎で攻撃してこいよ・・・ホレホレ」

やれるものならやってみろ、そう言わんばかりに顔を近づける刻に対し大神は動かない。

「無理だよネ・・・青い炎を使い過ぎると突然体温が極端に下がり、24時間は青い炎を使えなくなるんだもんネ」

「なっ・・・大神が・・・使えない・・・？青い炎を　　！？」

初めて聞くことなのか、目を見開いて驚く桜。

「無敵の大神君最大の弱点だっ！！」

そんな様子を見て、きゃっびっくりと、大袈裟なジェスチャーも加え説明する刻だった・・・

「　　零だけじゃない、それはロスト。異能者なら誰にでも起こる現象だ。」

『！？』

真横から掛かってきた声に刻が動きを止めて固まり、全員がはっとしてその声のした方向に目を向ける。

「アレ・・・刹那来ちゃったノ？」

「ああ、来ちゃったぞ・・・！？・・・・・・」
”ソレ”が珍
種か？」

刻が入って来た窓の縁、そこに頬杖を付いてこちらを見つめる刹那
がいた。

CODE : 02 存在しない者たち（後書き）

目聡い人ならもうコラボ先分かったかもしれないですね。

次回からはオリジナル色が少し強くなるかも・・・では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0410n/>

C?DE : BREAKER ~ 戦慄の紅き雷光 ~

2010年10月10日17時54分発行